

王述坤 编著

日本 近现代文学 精读



南京大学出版社

日本国际交流基金日本語中心项目

王述坤 编著

日本 近现代文学 精读



南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学精读 / 王述坤编著. —南京: 南京大学出版社, 2009. 7

ISBN 978 - 7 - 305 - 06320 - 6

I. 日… II. 王… III. 日语—阅读教学—高等学校—教材 IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 122558 号

出版者 南京大学出版社
社 址 南京市汉口路 22 号
网 址 [http://www. NjupCo. c](http://www.NjupCo. c)
出版人 左 健

书 名 日本近现代文学精读
编 著 王述坤
责任编辑 田 雁

编辑热线 025-83596027

照 排 南京玄武湖印刷照排中心
印 刷 南京京新印刷厂
开 本 787×960 1/16 印张 22 字数 414 千
版 次 2009 年 7 月第 1 版 2009 年 7 月第 1 次印刷
ISBN 978 - 7 - 305 - 06320 - 6
定 价 38.00 元

发行热线 025-83594756

电子邮箱 Press@NjupCo. com

Sales@NjupCo. com(市场部)

* 版权所有, 侵权必究

* 凡购买南大版图书, 如有印装质量问题, 请与所购图书销售部门联系调换

前言

什么是文学？

对于“文学”这个概念，日本京都国际日本文化研究中心著名教授铃木贞美先生曾专门写过一本《日本の“文学”概念》，他在书中提出：自古至今，东西方乃至日本和中国，随着时代的变迁，文学的概念本身也发生着演变。文学是语言文字的艺术，是文化的重要载体，再现一定时期、一定地域的社会生活场景，以不同的形式表现人内心的七情六欲、喜怒哀乐。所以，有人把文学称做“人学”。人们通过文学的认识、教化、审美、娱乐作用，来丰富自己的内心，来审视自己的人生，来陶冶自己的情操，来调剂自己的生活。故而，文学，除了能培养人的高素质、提高人的教养程度外，在影响人的世界观、人生观、审美观等方面，也是有着潜移默化的作用的。

日本民族有着比较悠久的文学传统。日本文学和世界各国各民族文学一起，构成了丰富多彩的世界文学宝库。日本文学一般有古典和近代之分。古典包括上代、中古、中世、近世，有名的《源氏物语》即是中古文学。明治维新以后的明治、大正、昭和文学，一般称为近代文学。而平成文学，则算是现代文学了。

文学形式，当然包括有小说、散文、诗歌、戏剧脚本等，本书主要选取了日本近代小说。正如小森阳一教授在为本书所写序言中所说，日本近代“小说”中包括了受欧洲文学“novel”影响的小说和属于“街谈巷语”的小说，两者并非同种，而是有着千差万别。两者都学习，对学生了解日本文学的变迁史不无裨益。

我国大学日语专业的高年生、特别是攻读日本语言、文学、文化的硕士研究生，无论是作为生动语言的外语工具来学习，还是作为提高自己的专业素养来学习，都是不能不学习日本文学的。笔者以为，时下日语专业的无论是本科生还是研究生，对日本文学的学习、理解和研究仍然是不够的，而多具有一些文学知识，非但与今后无论从事何种职业都不相矛盾，相反，从中所得到的知

识和素养却是受益终生的。所以,文学课程历来被作为大学外语专业的主干课程。

本人学习、研究、讲授、翻译日本文学已有 50 年,为研究日本文学,旅日时间也长达七八年之久。三四十年来,在教授本科生以及指导硕士研究生期间积累了不少讲稿,本书就是在这个基础上经过补充完善而完成的。

本书在编写上与国内出版的一些同类教材略有不同,大致表现在以下几个方面:

(1)早在十余年前,作为日本国际交流基金资助出版项目,本书完稿于本人在东京大学大学院综合文化研究科访学期间。应该强调的是,该大学著名教授小森阳一先生给予本人许多宝贵的指导意见,如原文一律录自各位作家的全集,而不是选自文学大系类图书中的某作家个人集,这就保证了原作文字的准确性。又如保留原文中的历史假名表记,这样读者就可以看到原作的历史风貌。

(2)国内出版的同类书多由“课文”、“单词注释”、“作者简介”等构成。即使有“作品解说”,一般也是非常简略的。而本书除在“作品解说”上尽量做到内容充实外,还着重撰写了“作家和作品在文学史上的地位”部分,相信它能够给读者深入了解和理解所读作品以帮助。

(3)本人在“作品解说”和“作家和作品在文学史上的地位”部分,从纵(涉及文学史)横(涉及同一流派其他作家)两个方面发表了自己的一些观点,期望读者能将各作品及其作家放在一个文学史的框架中加以认识。

(4)本书的前身是《近现代日本文学选读》,曾由辽宁人民出版社出版。现经过全面、认真的修订整理,由南京大学出版社重新出版之际,本人将书名改为《近现代日本文学精读》,觉得这样与本书所涵的内容及编写风格更符合。

吕元明先生(东北师范大学教授)、谭晶华先生(中国日本文学研究会会长,教育部高校外语专业日语教学指导委员会主任,上海外国语大学副校长)、叶琳先生(教育部高校外语专业日语教学指导委员会委员、南京大学外国语学院日语系主任)慨然为本书写下推荐词,在此深表谢忱!本书能够及时顺利地出版,首先得力于责任编辑田雁先生的辛勤劳动,也在此表示感谢!

由于本人水平所限,尽管对书稿做了认真修订,疏误之处仍然在所难免,敬请日语界前辈、同仁和诸位读者朋友给予指正。

王述坤于南京
2009 年 6 月

序

東京大学大学院 総合文化研究科 教授 小森陽一

日本の近代小説は、その出発点から、ある分裂した状態に置かれている。その分裂は、“小説”という言葉そのものにはらみこまれている。坪内逍遙は、『小説神髓』（一八八五年）において、近代小説のあるべき方向を提示したが、その際、英語のnovelの翻訳語として、“小説”という漢字二字熟語を選んだ。逍遙以後、“小説”という言葉は、“過去または現代の事実や実生活に取材した人物や事件が、想像力によって仮想された散文の物語”という、novelの概念の枠組みで使用されていくことになる。しかし、“小説”という漢字二字熟語は、漢文の永い歴史の中で、もう一つの原意を持ちつづけているのである。それは、『漢書』の“芸文志”に、“小説家流蓋出於稗官、街談巷語道聽塗說者之所造也”と規定されているように、街の巷で流布している噂話、奇談、伝奇の類を、“稗官”が収集して書きとめたもの、決して正史には書きこまれることのないような話、という意味である。

もちろん、欧米の近代化をモデルにしながら、“文明開化”、“富国強兵”、“殖産興業”、“脱亜入欧”をめざした日本において、novelの翻訳語としての“小説”があるべき文学の目標となり、“街談巷語”としての“小説”は、抑圧の対象となってきたことは事実である。批評や研究においても、欧米の“小説”を基準にして、日本の“小説”が未成熟なものとして評価されたり、欧米の文学流派としてのロマン主義になぞらえて、日本の“小説”と作家を分類し、文学史的な位置づけを行うことが多かった。その中で、日本において発生した“小説”の一変種として、作家の身辺雑記を綴った“私小説”が見いだされ、そこにあたかも日本の近代化の特殊性があるかのように論じられることもあった。こうした発想方法は、或る意味では、ユーロセントリズムとオリエンタリズムに置かれた。文学における差別主義の一つのあらわれでもある。

本書に収録された二二篇の文学テキストのほとんどは“小説”であるが、

興味深いことに、その全てにおいて、novelの翻訳語としての“小説”と、“街談巷語”としての“小説”という、二つの概念が、非常に強い衝突を演じていることが見えてくる。あたかも、抑圧された噂話や奇談や伝奇をめぐる記憶が、その抑圧をはねかえす闘争を展開しているかのような感がある。そのことはまた、“近代”の“日本語”が、決して単一なものではなく、複雑性の葛藤として現象していることをも、明らかにしているのである。

本書の読者が、一つ一つのテキストにおける、言葉の争闘を、具体的に読みとってくださることで、日本の近代主義をめぐる、新しい評価のあり方が、探求されていくことを願っている。そして、本書を編集された、王述坤教授に、心からの敬意を表明するものである。

目 次

序	(1)
一、学問のすすめ(抜粋)	福沢 諭吉 (1)
二、浮雲(抜粋)	二葉亭四迷 (9)
三、十三夜(上)	樋口 一葉 (28)
四、一口剣(下)	幸田 露伴 (48)
五、並木	島崎 藤村 (60)
六、忘れえぬ人人	国木田独步 (78)
七、吾輩は猫である(抜粋)	夏目 漱石 (97)
八、高瀬舟	森 鷗外 (115)
九、カインの末裔(抜粋)	有島 武郎 (131)
十、城の崎にて	志賀 直哉 (145)
十一、羅生門	芥川龍之介 (156)
十二、掛取り	永井 荷風 (169)
十三、西班牙犬の家	佐藤 春夫 (188)
十四、セメント樽の中の手紙	葉山 嘉樹 (201)
十五、雪国(抜粋)	川端 康成 (208)
十六、春さきの風	中野 重治 (220)
十七、遙拝隊長(抜粋)	井伏 鱒二 (234)
十八、山月記	中島 敦 (246)
十九、狐(抜粋)	野上弥生子 (256)
二十、焼跡のイエス	石川 淳 (278)
二十一、顔の中の赤い月(抜粋)	野間 宏 (297)
二十二、奇妙な仕事	大江健三郎 (314)
付記	(331)
日本近代文学史年表	(332)
主要参考書目	(341)

一、学問のすすめ(抜粹)

福沢諭吉

天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人、皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との^{はたらき}働^{もつ}を以て、天地の^{かん}間にあるよろづの物と資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の^{さまたげ}妨^{おのおの}をなさずして、各安樂に^{このよ}此世を渡らしめ給ふの趣意なり。されども今、^{この}広く此人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、^{げにん}下人もありて、^{その}其有様、^{どろ}雲と^{どろ}坭との相違あるに似たるは何ぞや。其次第、^{あきらか}甚だ^{じつごきよう}明なり。実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに^{より}由て出^で来るものなり。又世の中に^{また}むつかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。其むつかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人と云ふ。^{すべ}都て心を用ひ心配する仕事はむつかしくして、手足を^{もちう}用^{りきえき}る力役はやすし。故に医者、学者、政府の役人、又は大なる商売をする町人、^{あまた}夥多の奉公人を召使ふ、^{おおびやくしやう}大百姓などは、身分重くして^{たつと}貴き者と云ふべし。身分重くして貴ければ、^{おのず}自から其家も^{とみ}富て、^{しもじも}下下の者より見れば、及ぶべからざるやうなれども、^{もと}其本を^{たずぬ}尋れば、^{ただ}唯其人に学問の力あるとなきとに^{より}由て、其相違も^で出来たるのみにて、天より^{きだめ}定たる約束にあらず。^{ことわざ}諺に云く、天は^{ふうき}富貴を人に与へずしてこれを其人の^{はたらき}働^{あたう}に与るものなりと。されば前にも云へる通り、人は生れながらにして貴賤貧富の別

なし。唯^{ただ}学問^{つとめ}を勤^{つとめ}て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。

学問とは、唯むつかしき字を知り、解^げし難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上^{じつ}に実^{じつ}のなき文学を云ふにあらず。これ等の文学も自^{おのず}から人の心を悦^{よろこ}ばしめ、随分^{ちようほう}調法なるものなれども、古来世間の儒者和学者などの申すやう、さまであがめ貴^{たつと}むべきものにあらず。古来、漢学者に世帯持^{せたいもち}の上手^{じようず}なる者も少く、和歌をよくして商売に巧者^{こうしや}なる町人も稀^{まれ}なり。これがため心ある町人百姓は、其子の学問に^{しゆつせい}出精^{しゆつせい}するを見て、やがて身代^{しんだい}を持崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟^{ひつきよう}、其学問^{その}の実^{じつ}に遠くして、日用^{じつよう}の間に合^あはぬ証拠^{しやうこ}なり。されば今斯^かる実なき学問は先づ次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学^{じつがく}なり。譬^{たと}へば、いろは四十七文字を習ひ、手紙^{もんごん}の文言^{ちようあい}、帳合^{しかた}の仕方^{そろばん}、算盤^{そろばん}の稽古^{けいこ}、天秤^{てんびん}の取扱^な等を心得^な、尚又^{なおまた}進^{すすん}で学ぶべき箇条^{はなはだ}は甚^{はなはだ}多し。地理学とは、日本国中は勿論、世界万国の風土^{ふうど}道案内^{みちあんない}なり。究理学とは、天地万物の性質^{はたらき}を見て其^{はたらき}働^{はたらき}を知る学問なり。歴史とは、年代記のくはしき者にて、万国古今の有様^{せんさく}を詮索^{せんさく}する書物なり。経済学とは、一身一家の世帯^{せたい}より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは、身の行^{おこない}を修め人に交^{まじわ}り此世を渡るべき天然の道理^{のべ}を述たるものなり。是等^{これら}の学問をするに、何れも西洋の翻訳書を取調べ、大抵の事は日本の仮名^{かな}にて用を便じ、或は年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事^{じつじ}を押へ、其事に就^つき其物に従ひ、近く物事の道理^{もとめ}を求^{もとめ}て、今日の用を達すべきなり。右は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく、皆^{ことごと}悉^{ことごと}くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に、士農工商^{おのおの}各^{おの}其分^{ぶん}を尽し銘銘の家業を営み、身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり。

学問をするには、分限^{ぶんげん}を知る事肝要なり。人の天然生れ^{つぎ}附^{つな}は、繋^{つな}がれず縛^{しば}られず、一人前^{いちにんまえ}の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、唯^{ただ}自由自在とのみ唱^{とな}へて分限を知らざれば、我儘放蕩^{わがままほうとう}に陥ること多し。即ち其分限とは、天の道理^{もとづ}に基^きき、人の情^{じよう}に従ひ、他人の妨^{さまたげ}を為さずして我一身^{わが}の自由を達することなり。自由と我儘との界^{さかい}は、他人の妨^なを為すと為さざるとの間にあり。譬^{たと}へば自分の金銀を費^{ついや}して為すことなれば、仮令^{たと}ひ酒色^{ふけ}に耽り放蕩を尽すも、自由自在なるべきに似たれども、決して然らず。一人の放蕩は諸人の手本となり、遂に世間の風俗を乱りて、人の教に妨^なを為すがゆゑに、其費^{ついや}す所の金銀は其人のものたりとも、其罪許すべからず。又、自由独立の事は、人の一身^あに在るのみならず、一国の上にもあることなり。我日本は亜細亞洲^{アジア}の東に離れたる一個の島国にて、古来外国と交^{まじわり}を結ばず、独^{ひと}り自国の産物のみを衣食して、不足と思ひしこともなかりしが、嘉永年中、アメリカ人渡来せしより、外国交易の事始^{こと}り、今日の有様に及びしことにて、開港の後も色々^{さくくじようい}と議論多く、鎖国攘夷^{さくこくじようい}など、やかましく云ひし者もありしかども、其見る所甚だ狭く、諺に云ふ井^いの底^{そこ}の蛙^{かわず}にて、其議論取るに足らず。日本とても西洋諸国とても、同じ天地の間にありて、同じ日輪^{にちりん}に照らされ、同じ月を眺め、海を共にし、空気を共にし、情合^{じようあい}相同じき人民なれば、ここに余^{あま}るものは彼に渡し、彼に余るものは我に取り、互に相教へ互に相学び、恥^{はず}ることもなく誇ることもなく、互に便利を達し、互に其幸^{さち}を祈り、天理人道に^{したがい}従^{したが}て互の交を結び、理のためにはアフリカの黒奴にも恐入^{こくど}り、道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず、国の恥辱とありては、日本国中の人民、一人も残らず命を棄てて国の威光を落さざるこそ、一国の自由独立と申すべきなり。然るを支那人などの如く、我国より外に国なき如く、外国の人を見ればひとくちに夷^い

てき 夷狄と唱へ、よつあし 四足にてあるく ちくろい 畜類のやうに、これを いや 賤しめこれを きた 嫌ら
 ひ、自国の力をも計らずして みたり 妄に外国人を おいはら 追 払はんとし、かえつ 却て其夷狄
 に くるし 窘めらるるなどの始末は、実に国の ぶんげん 分限を知らず、いちにん 一人の身の上にて
 云へば、天然の自由を達せずして、わがままほうとう わがままほうとう に陥る者と云ふべし。王制
 ひとたびあらた 一度新なりしより以来、我日本の政風 大に おおい 改り、あたらた 外は万国の公法を
 もつ 以て外国に交り、内は人民に自由独立の趣旨を示し、既に平民へ みようじ 苗字乗馬
 を許せしが如きは、かいびやく 開闢以来の一美事、し 土農工商、四民の位を一様にする
 の 基、この さいだま 基に 定めたりと云ふべきなり。されば今より後は、日本国中の
 人民に、生れながら其身に つき 附たる くらい 位などと申すは先づなき姿にて、ただ
 其人の才徳と其居処とに により 由て位もあるものなり。譬へば、政府の官吏を粗
 略にせざるは当然の事なれども、こは其人の身の たつと 貴きにあらず、其人の才
 徳を以て其役義を勤め、国民のために 貴き 国法を取扱ふがゆへに、これを貴
 ぶのみ。人の貴きにあらず、国法の貴きなり。旧幕府の時代、東海道に お
 ちやつば 茶壺の通行せしは、皆人の知る所なり。その他、御用の鷹は人よりも貴く、
 御用の馬には往来の旅人も みち 路を 避る等、都て御用の二字を つく 附れば、石にて
 も瓦にても恐ろしく 貴きものやうに見へ、世の中の人 いくしえ 数千百年の 古
 よりこれを嫌ひながら、又自然に きたり 其仕来に慣れ、上下互に見苦しき風俗を
 成せしことなれども、ひつきようこれら 畢竟是等は皆法の貴きにもあらず、品物の貴きにも
 あらず、唯 いたすら 徒に政府の威光を張り、人を畏して、人の自由を妨げんとする
 ひきよう 卑怯なる仕方にて、実なき きたい 虚威と云ふものなり。今日に至りては、もはや
 日本国内に しか 斯る浅ましき制度風俗は 絶てなき 筈なれば、人人安心いたし、
 かりそめにも政府に対して不平を抱くことあらば、これを包みかくして 暗
 に上を くら 怨むることなく、其路を求め其筋に によ 由り、静にこれを うつたえ 訴て遠慮
 なく議論すべし。天理人情に かな 叶ふ事ならば、一命をも なげうち 抛て争ふべき

なり。^{これすなわ}是即ち一国人民たる者の分限と申すものなり。

■ 作者小伝

福沢諭吉[ふくざわゆきち・1834～1901] 明治時代思想家、教育家。大阪生まれ。父は下級武士で、諭吉の生後一年半で、病死して、一家は郷里中津に帰る。封建門閥制度に矛盾を痛感した彼は、青年期に入るや、まず学問の新天地を求めて、大阪の蘭学者緒方洪庵(おがたこうあん)の塾に入って、蘭学の修業に励んだ。

1858年、24才で、江戸に出て、築地の中津藩邸内に、塾を開く。後の慶応義塾のもとである。ほどなく、蘭学が時代に適せぬことを知った彼は、英学に転じ、洋学の力が認められ、幕府に登用され、外交文書の翻訳に従事することになる。そして、3回洋行する機会に恵まれた。それらの体験や、原書の知識に基づき、『西洋事情』など多くの西洋紹介書を出し、その名を天下に知られる。明治維新の時、34才の彼は、新政府から再三出仕を勧められたが、受け入れず、もっぱら民間で慶応義塾での教育、国民啓蒙のための著作を、発表することを自らの使命とする態度を変えなかった。慶応義塾も、さらに三田の現地に遷った。その間、日本最大の洋学校たる地位を確立した。また多くの福沢の著書は、国民から愛読され、なかでも『学問ノススメ』は、文明開化のバイブルの観があり、社会的影響の大きかったことは、今日の想像を越えるものがあつた。そして、明六社を主宰して、国民の啓蒙につとめた。明治初年から10年頃までの日本の開明の気運は、福沢によって指導されたといっても過言ではない。

その後、日本の官僚国家体制の強化によって、福沢の自由主義思想は、時代の主流から遠ざかるにいたつたが、1882年には『時事新報』を創刊し、独立自尊・経済実学を鼓吹して、新聞人としても、多大な成功を収めた。著書には、『学問ノススメ』(明治5～9年刊)、『西洋事情』(慶応2～明治3年刊)のほかに、『文明論之概略』(明治8年刊)、『福翁百話』(明治30年刊)、『福翁自伝』(明治32年刊)などがある。

■ 注釈

- | | |
|----------------|---|
| されば[然れば] (接) | ①それゆえに。=[だから]と。②それでは。さらに。③さて。 |
| よろず[万] | ①(造語)「まん」の雅語的表現。[数が非常に多いことにたとえられる]。②(副)すべての点において。[～屋]いろんな種類のものを売る店。 |
| 給う[たまう、賜う](助動) | 尊敬すべき相手の動作であることを表す。なさる、……になる。 |
| ざる(助動) | 文語否定助動詞「ず」の連体形。 |
| いでく(古語) | できる。あらわれる。生ずる。 |

夥多[あまた](副)	「たくさん」の意の雅語的表現。
召使ふ[めしつかう](他、五)	雇って、自分の身のまわりの仕事や家の雑用をさせること。
べからざる(助動)	「べし」の否定形の連体形。……べきではない……。
さまで(副)	「それほどまで」の意の、やや改まった表現。例: 「～気にすることはない。」
究理学[きゅうりがく](名)	明治時代の初期、物理学の称。
詮索[せんさく](名、他、サ)	さがしもとめること。
シナ人[支那人](名)	戦前、中国人に対する侮蔑的呼称。
苗字乗馬[みょうじじょうば](名)	名字をとなえ、(刀をさし)馬に乗ること。維新前に平民はそれを許されなかった。
こ(代)	これ。この。
尊ぶ[とうとぶ](他、五)	敬意を表して重んじる。敬う。
徒に[いたずらに](副)	むだに、無益に。
かりそめにも(連)	かりにも。

■ 作品解説

『学問のすすめ』は1872年から1876年にかけて発表されたものである。17編の小冊子として出版された。最初は初編一冊だけのつもりだったのが、意外に需要が多かったので書き続けることになった。各編おおむね主題を異にした独立した文章からなっている。その主な内容は次の通りである。

1. 人権平等、独立自尊、実学、国家独立、法律に従う精神を集約したもので、全体の総論に相当する。
2. 官民対等官尊民卑打破、社会契約論などをといている。
3. 国家独立論。
4. 在野学者の使命論。
5. 慶応義塾生たちへの激励詞。
6. 国法の尊きを論じ、暴力否定、国民順法精神をとく。
7. 国民の職分を論ずる。
8. 個人自由の重要性を説く。
9. 若者の消極的生活態度を戒め、志を大きくして社会に貢献すべきことを教える。
10. 外国に対する国民の依頼心を戒め、外尊内卑の弊から脱去することを力説する。
11. 上下の名分を重んずる東洋古来の儒教道德の欠点を鋭く批判する。
12. 前半は演説の重要性、すなわち学問の活用を教える。
13. 思想言論の自由が文明社会の発展にいかに大切か及び女権の尊重、女性解放を力

説する。

14. 前半は自己反省は常にすることの必要性を、後半は人を世話するには恩、威並行することは必要であることを説く。

15. 懐疑の精神が文明発達の前動力であることを説く。

16. 前半は手近く独立を守ること、後半は考えは実行力が伴わなければ役に立たないことを教える。

17. 信用論と社交論思想言論の交流の必要性を説く。

1868年の明治維新は日本におけるブルジョア革命である。明治新政権は「富国強兵」、「文明開化」のスローガンのもとで、一連の開明的政策を打ち出し、近代的統一国家への第一歩をふみだした。人人は鎖国時代の閉ざされた世界から、西洋の近代につづいて開かれた世界へと一気に引き出されたのである。このような新時代にふさわしい人間のあり方、ものの見方を普及させようと努力したのが、西洋の思想と文化を導入する使命感に燃えたっている森有礼、福沢諭吉を代表とする明六社の洋学者であって、長い鎖国の小天地からにわかに国際社会の一員となった小島国日本を近代化し、国民の精神革命を起こそうというのが福沢の念願であった。本文は『学問のすすめ』初編の大半で、1989年岩波書店が出版した『福沢諭吉選集』によったものである。

■ 文学史における作家と作品の位置

福沢の著作を仮に二つの時期に大きく分ければ、『学問ノススメ』は前期の著作の総決算であるとともに、後期の著作の出発点といえる。これ以降、現れる幾多の著書の骨格は、一応この本にそなわっていると言える。『学問ノススメ』は、福沢思想の総論(廃藩置県による)士族階級の消滅、「四民平等」、「学問」による出世などの福沢思想の総論とすれば、その後の著作は各論であり、時には修正版でもあった。そういう意味でも、この書は、福沢の著作中、中心の座を占めるものである。『学問ノススメ』について、とくに注目すべきことは、学制発布との関連である。学制発布の趣意書の思想は『学問ノススメ』初編に書いてある内容とよく似ていることからでも当時の教育界に対する影響はどれほど強いかに一応見当がつく。当時の世間では、「文部省は竹橋にあるが、文部卿は三田にあり」といった。「文部省の建物は竹橋というところにあるが、文部省の方針を支配する実力者は、三田に住む福沢諭吉だ」という意味である。

『学問ノススメ』の流行は何といっても全国の教科書にもちいられたことが大きな原因であった。本書が明治啓蒙期に育った青少年にいかに大きな希望を与え、彼らの志をはげましたか計り知れぬものがあつた。明治中期以降、福沢の思想は国家主義・軍国主義の一途をたどった政府の教育方針に合わないから教育の主流となることはなかった。が、福沢氏が死後約半世紀を経た終戦後に、戦時中には肩身の狭かつた『学問ノススメ』が、ふたたび人気を盛り返した。外国人の間にも熱心な福沢研究家が現れ、『学問ノススメ』は、いまや世界の古典に昇格しつつあるようにさえおもわれる。

アメリカの元駐日大使ライシャワーも大の福沢ファンで、かれは『学問ノススメ』を「偉大な著書」とたたえ、「明治の多くの指導者中、もっとも偉大な人物は福沢諭吉だ。明治の指導者の遺産の中、現代日本に全面的に適合するものは福沢の思想だけである」と言っている。ライシャワー氏の言葉は多少割引して考えても、福沢の影響はどれほど大きいかが伺えるものである。

そもそも、維新後の20年間は、文学史の方からいえば、文学が社会的に文化的にいったいどういうものかを徐々に認識していった時代である。作品そのものとしてはこれという文学作品はほとんどなかった。福沢は一人で西洋の事情、地理、歴史、文化、制度、物理、化学、演説法、あるいは射撃法、簿記法といったように、翻訳ではあるがヨーロッパの物質文明、合理主義文明のほとんどあらゆる面についての紹介を行った。この点からいえば、福沢は言うまでもなく、明治初期の民衆への啓蒙活動の功労者の一人である。実学による立身出世の可能性を啓示した『学問のすすめ』は、文学そのものと直接かわるものではなかったが、その新しい人間観こそ、近代文学を生み出す有力な母胎の一つとなったのは云云するまでもないのである。

二、浮　　雲(抜粹)

二葉亭四迷

枕頭^{まくらもと}で喚覚^{よびさ}ます下女^{うろたへ}の声に見果てぬ夢を驚かされて文三が狼狽^{うろたへ}た顔を振揚げて向ふを見ればはや障子には朝日影が斜めに射してゐる「ヤレ寐過したか……」と思ふ間もなく引続いてムクムクと浮み上ツた「免職」の二字で狭い胸がまづ塞^{ふさ}がる……茶^{をんばこ}苜^{をんばこ}を振掛^{しにかへる}けられた死^{おどりあが}蟻^{あが}の身で躍上^{はさ}り衣服^{ふく}を更^{あらた}めて夜の物を揚げあへず楊枝^{ようじ}を口へ頬張^{ふてぬぐひ}り故手拭^はを前帯^しに挿^はんで周章^{あはて}で二階を降りる其足音を聞きつけてか奥の間で「文さん疾く為ないと遅くなるヨ」トいふお政^{かど}の声に圭角^{かど}はないが文三の胸にはぎつくり応へて返答^{まごつ}にも迷惑^{ようじ}く、そこで頬張^{ようじ}つてゐた楊枝^{ようじ}を是れ幸ひと我にも解らぬ出鱈^{くごもりがら}目を句籠^{すんのが}勝^{そこそこ}に言^{あさはん}つてまづ一寸遁^はれ匆匆^はに顔を洗^{あさはん}つて朝飯^{あさはん}の膳^はに向ツたが胸^{ふさ}のみ塞^{はし}がツて箸^{はし}の歩^はみも止まりがち三膳^はの飯^はを二膳^はで済^はまして何時^{いつ}もならグツと突出^はす膳^はもソツと片寄^はせるほどの心遣^はひ身体^はまで俄^{にわか}に小ひさくなつたやうに思はれる

文三が食事を済まして椽側^{ひそ}を廻^はり竊^{ひそ}かに奥の間を覗いて見ればお政ばかりでお勢^{ちかごろ}の姿は見えぬ お勢^{ちかごろ}は近属^{するがだいへん}早朝^{するがだいへん}より駿河台^{するがだいへん}辺へ英語^{おそろおそろさしき}の稽古^{おそろおそろさしき}に参るやうになつたことゆゑ^{さて}諸^{おそろおそろさしき}は今日も最^{おそろおそろさしき}う出かけたのかと恐^{おそろおそろさしき}座^{おそろおそろさしき}鋪^{おそろおそろさしき}へ這入^{はい}つて来る その文三の顔を見て今まで火鉢^{すりみがき}の琢磨^{すりみがき}をしてゐたお政^{すりみがき}が俄^{にわか}かに光沢^{つやぶきん}布巾^{とど}の手を止めて不思議^{とど}さうな顔をしたも其筈^{かんしよく}此時^{かんしよく}の文三^{かんしよく}の顔^{かんしよく}色^{かんしよく}がツイー通りの顔^{かんしよく}色^{かんしよく}でない 蒼^{かんしよく}ざめてゐて力^{かんしよく}なさきうで悲^{かんしよく}しきうで恨^{かんしよく}めしきうで恥^{かんしよく}かしきうでイヤハヤ何とも言^{かんしよく}様^{かんしよく}がない